

宗族社会における女性の役割

— 金門縣珠山聚落を事例として

松岡 正子

珠山村落は、650年以上の歴史をもつ、金門を代表する単姓村である。薛氏は元末に戦禍を逃れて珠山村にたどりつき、様々な歴史的事件を経ながら、伝統的な閩南文化を維持するとともに、移民として働いた南洋の異文化も受容して多元的な文化を発展させてきた。

本稿では、典型的な宗族社会である珠山村において、宗族の非構成員である女性がどのように宗族社会に組み込まれ役割を担ってきたのか、まず、珠山村の薛氏一族の歴史と現在の宗親會等の活動を整理したうえで、80歳代女性たちのライフヒストリーを通して、宗族社会における女性の役割の変化について初歩的な考察を行う。

1. 宗族社会と女性に関する先行研究

金門島⁽¹⁾の村落は、多くが何代も続く単姓村であり、一つの姓を中心とした父系親族集団（宗族）から形成された宗族社会である。宗族社会は、共通の祖先を祀る宗祠と族譜をもち、族譜には、構成員として男性が記され、祖先祭祀等の活動は男性のみで行う。これに対して女性は、族譜に記載されることはなく、宗族の正式の一員としては認められていない。なぜなら、同姓不婚の原則のもと、女性は外部から嫁いできた他姓の者であり、或は村内で生まれて外部に嫁ぐ未婚者だからである。外部から嫁いできた女性は、結婚後に夫の家族の成員となり、死後、子孫によって夫とともに

(1) 金門は台湾金門縣に属する。金門島と小金門ほか12島からなり、総面積152万㎡、人口約10万人。廈門から2キロしか離れていないため兩岸問題の軍事最前線であり、1949年10月古寧頭戦役後から1992年まで軍事体制下にあった。金門の概況や歴史等については川島 [2011 : 7~128] 参照。

祀られるが、族譜に記されることはない。ただし、宗族は、基本単位は家族であり、家族成員は儒教倫理によって行動を規定され、嫁は夫の両親と夫に従属する。よって、宗族の諸活動において、女性は家族の重要な成員として、宗族活動の裏方の役割を与えられていた。

さらに、金門社会は、近世以来、海外移民を送り出す「僑郷」でもあった。川島論文は、僑郷時代における村落の運営と女性について次のようにのべる [2011 : 8- 9]。「金門社会は宗族的な紐帯の強い単姓村で構成され、移民もまた郷村単位で行われることが多かった…そのため成人して結婚して子供をもうけると、海外に移民し島外でも家庭を作る男性が少なくなかった。その結果、移民が活発な時期には、島内人口は女性が多くなり、子供の教育や家計管理、郷村の運営や宗族の行事関連の業務等の面で、女性の社会的な役割は大きくなった」と。

すなわち金門島の村落は、戦時体制以前は、日本軍戦占領期を除いてはずっと移民社会であった。元末に金門島に移住してきた薛氏一族は、その後も宗族単位で島内を移り、珠門の地をみつけて定住する。しかし土地は痩せ、降水量も少なかったため農業だけで暮らしていくことはできなかった。そこで定住後、男性は結婚して子孫を残すという宗族構成員の第一の義務を果たすと、さらに宗族（村落）単位で海外に行って働き、現地の女性と結婚して子孫を残し、第二の宗族拠点をつくった。薛氏の場合、フィリピン・ルソン島であると思われる。一方、男性の海外滞在は一般に長期に及び、そこで新たな家族もつくったため、金門に残された家族は夫の両親と妻で構成され、妻は戸主の代理としての役割を担った。川島は「子供の教育や家計管理、郷村の運営や宗族の行事関連の業務等の面で女性の社会的役割が大きかった」と指摘する。ただし、具体的な事例は示されておらず、女性自身の考え方も不明である。

では、郷村の運営や宗族の行事関連業務に関して、村民ではあるが宗族の非構成員であるという位置づけの女性たちはどのような形で社会的に関与していたのか。松沢は、台湾漢人社会における女性の社会的役割について次のようにのべる [松沢1995 : 172- 175]。「宗族（同族）は人間関係、社会組織、イデオロギーの基本である。…宗族に属するそれぞれの家は、ふつつ父とその息子たち夫婦を中心に構成される…女の生活は家族を離れ

ではなく、家族の中の人間関係は倫理規範によって律せられる」、「父系制の台湾漢人社会では、女は一時的に父または夫の家族の成員となっても、また死後祖先として夫ともに息子や孫によって祀られても、過去から未来へと継承される家の系譜の中には位置しない…しかし女の一生は宗族制度の中に組み込まれ、婚礼や習俗によって意味づけられる」。ここでも女性が婚礼や習俗において役割をもつことは示唆されているが、宗族の具体的な行事や郷村の運営にはふれていない。

そこで本稿では、特に「宗族の行事や郷村の運営」に関する女性の社会的役割とその変化について、珠山村の宗族活動や村落運営の現状と問題点をふまえて、80代女性のライフストーリーの事例を中心に分析する。

2. 珠山の概況と歴史

珠山は、「四水帰塘」と称される、風水に優れた静かな村落である。東



図1 珠山村

出所：金門國家公園管理處「珠山一民宿導覽地図」より。

に鷄奄山、西北に亀山に囲まれた盆地で、閩南式の美しい家屋が大小2つの宗祠を中心に、大潭に南面して並ぶ(図1)。村の総面積は11.2ha、うち居住区は1.2ha。2016年の現地の統計によれば、人口は、戸籍上は400~420人であるが、常住者は36戸、132人にすぎない。男女比は70:62。年齢別人口は、10歳以下3人、10代10人、20代6人、30代8人、40代15人、50代15人、61歳以上は27人、年齢不明48人の老人、高齢化が顕著である。10代以下は10%未満、労働人口である20~60歳代は44人で、全体の3分の1にすぎず、60歳以上の高齢者が3分の2あまりを占める。中青年層を中心とした人口流出が深刻で、親世代は村に留まり、子世代はすでに県城や台湾本島の都市に家屋をもって家族と暮らす。

村は1995年に国立公園区の一部に指定され、民宿経営を中心に観光開発が進められたが、観光村としての発展はなお低調である。観光業としては14戸の民宿があるのみで、飲食店や雑貨店はない。また民宿14戸のうち村民が経営するのはわずか2戸で、その他の民宿経営者は外部の者で村に常住せず、村内の女性に民宿の管理や旅客の世話を委託している。民宿は1戸あたり客数10数人の小規模経営で、宿泊と朝食のみを提供する。祝日はほぼ満杯、日常の稼働率は60%程度である。人口は観光開発当時の1996年に156人あったのが、さらに減り続けている。常住者の多くを占める高齢者は、自給的な農業を行い、年金と子供からの仕送りでくらす。労働人口の大部分は、老いた親のために帰村した者で、金城鎮など村外で働き、数人の孫世代も鎮の小学校に通う。

薛DM(男性45歳)によれば、住民が戻ってこられない原因の一つは、国家公園法によって居住が制限されていることにあるという。金門は1992年に戦時体制がようやく解除され、1995年に国立公園区域が指定されて、珠山もそれに含まれた。金門国家公園管理辦法によれば、該当地域の家屋の使用権は金門国家公園にあり、国家公園側は旧屋を閩南型家屋に改修して民宿を経営する者を入札によって決め、優先権を得た者には改築費用を補助して30年間の使用権を与えた。そのため14戸の民宿のうち、12戸が経営権を入札で得た外部者の経営による。建造物の保護のみを優先した政策であり、珠山の伝統文化や教育、人文の発展に影響を及ぼしていると批判する。

薛氏一族の歴史は、「珠山聚落」〔謝翠玉2008：90- 91〕によれば次のようである。薛氏は、祖先は河南にいたが、宋代に閩南の銀同（現福建省同安県）に移り、元末の1345年、戦乱のために薛貞固が一族を率いて金門の石井坑（現在の古崗村、太文山、亀山の間）に逃れた。石井坑は、旧名は許坑で、許氏が開いた村であるが、後に同安県の蔡氏、明初には泉州の董氏が来たため、薛氏は亀山兜（現在の珠山）に移った。亀山兜は陳氏が開いた村であるが、薛氏が増えたために陳氏は古区村に移り、薛氏の単姓村となった。

薛氏は、金門では最も古い宗族の一つである。一世・薛貞固と二世・成済の墓は不明であるが、珠山定住後の3世から26世まで（約650年間）の歴史ははっきりしている。珠山では、宗祠を中心に大社と小社に分かれて居住した。村内の多数の閩南式建造物は、多くが清代乾隆年間以降のもので、大宗宗祠（1768）や頂三落（1776）が最も古い。20世紀初頭、村人が南洋に出稼ぎに行き、僑匯（海外からの仕送り）がもたらされるようになると、さらに伝統的な閩南式建造物が大規模に増築された。薛紹鑽兄弟が建てた大夫第や下三落のほか、薛永南兄弟は南洋の異文化をとり入れて洋楼を建てた（1928）。

20世紀初頭は僑郷時代の最盛期であった。珠山の男性は結婚して子供をつくると、多くがフィリピンに渡って働いた。僑匯は、家族の生活を支えるとともに、村の様々な公共活動に投資された。1928年9月、薛永乾と永棟によって創刊された月刊誌『顕影』は、海外の村民に故郷の出来事を伝えるとともに、故郷への献金を呼びかけた⁽²⁾。村には「入口捐」という規定があった。16～50歳の男性には毎年1日の公共活動への労働（主に清掃活動）が義務付けられていたが、参加できない場合は銀五角を払い、海外に在住して裕福な者は二元、店を持つ者は四元以上を支払うことが決められており、道路や水路の補修に使われた。

僑匯は教育面にも活用された。1917年、珠山小学校が創立され、24年、珠山学校校友会（小学董事會）が設立された。校友会は各家庭から海外からの仕送りの10%を徴収して学校の運営費に充てることを決め、年間200

(2) 謝翠玉総編輯 [2008：95]。

～300元の献金を得た。36年には新校舎の建設を始めたが、日本軍占拠のために中断され、49年には国軍に接収され、89年に返還された。92年にホテルに改築されたが倒産し、今は薛 ZS が一部を家屋として借りている。

3. 珠山における宗族の活動

『薛氏宗親會106年度實録』によれば、珠山村落には4つの主要な組織がある。①薛氏宗親會（金門縣薛氏宗親會）、②基金會（財団法人金門縣薛氏基金會）、③發展協會（金門縣金城鎮珠山社区發展協會）、④大道宮管理委員會（金門縣金城鎮大道宮管理委員會）で、①②が薛氏の宗族活動、③が村の「雑事」、④が廟会活動を行う。珠山村は、宗族活動や宗教活動において独立した集団であるが、行政的には金城鎮の一集落であり、村役場や警察にあたるものがない。ただし実態は、薛氏という宗族が治安、行政、宗教など集落に関わるすべてを処理している。

4つの組織は、幹部はほぼ同じメンバーが兼任しており、宗親會が中心となって村の諸事全般に関して役割を分担する（表1）。実質的なリーダーは薛徳民（男性45歳）で、①の理事長と②の董事長、③④の総幹事を務める。高校卒業後、台北で大手電機メーカーに勤めていたが、2007年に老親の面倒をみるために一家で帰村した。また女性幹部として、黄恵玲（女性40歳代）が①の会計、②③④の出納を担当しており、女性も重要な役割もっていることがわかる。ただし、女性は冬至に宗祠で行われる祖先祭祀では、前日の準備と後日の後片付けは担当するが、当日の儀式には参加できない。

各組織の2017年度の活動は、『薛氏宗親會106年度實録』によれば次のようである。

宗親會は、最大の行事は冬至に宗祠で行う祖先祭祀である。2017年12月22日冬至會では、結婚や成人、戸主という新たな身分に変わった男性成員を承認し、長老を先頭に祖先祭祀を行い、宗親會の運営に関して討議した。[10:30-11:30]2017年から戸主になる者6名（男性）と2016年に結婚した者および成人した者7名（男性）が報告された。すべて「薛某の息子」と記されており、父系の継承を意味する。前者は4500元、後者は1000元を基金會に納める。また新婚の者は、当日の宴桌の経費を負担しなければな

表1 珠山村落の主要な組織

	宗親會	基金會	發展協會	大道宮管理委員會
任期	3年	3年	3年	4年
成員	薛徳民（理事長） 薛金満・薛永妥 薛明遠・薛承煒 薛承時・薛明盛 薛祖明・薛承敏 薛永僑・薛留芳 薛海南・薛芳萬 薛永喜・薛徳成 （以上理事） 薛永順（常務理事） 薛承助（顧問）	薛徳民（董事長） 薛承琛・薛承敏 薛永妥・薛祖明 薛承煒・薛金萬 （以上董事） 薛永順（監察人）	薛祖耀（理事長） 薛明遠・薛少騰 薛俊毅・薛永為 陳書毅・薛国鋒 （以上理事） 薛金萬（常務監事） 薛永妥・薛明盛（監事）	薛承煒（主任委員） 薛永妥（副主委） 薛明遠・薛祖凡 薛俊毅・薛徳民 薛国鋒・張永為 薛金萬・薛少騰 薛自新・薛祖耀 薛承煒（以上委員） 林芳旋（監事主席）
会務	薛少騰（総幹事） 黄惠玲（会計） 劉永書（出納） 薛明遠（総務）	薛少騰（総幹事） 薛徳強（幹事） 薛永妥（会計） 黄惠玲（出納） 薛明遠（総務）	薛徳民（総幹事） 劉永書（出納） 黄惠玲（出納）	薛徳民（総幹事） 薛承煒（総務） 劉永書（会計） 黄惠玲（出納）

出所：薛徳民ら編輯（2017）『薛氏宗親會106年度實録』2頁より作成。

らない。

[11：30－12：00] 長老が伝統の「長袍馬褂」を着て祖先を祀る。記念撮影。

[11：50－14：00] 理監事選挙、理事会年度會務報告、食事懇談会

なお、事前の第12回理監事会議（11月18日珠山活動中心）では、基金會の財源改善の必要性（旧小学校の一部の賃貸料以外の定収入がないこと）や族譜の増編が提案され、冬至會については宴卓を13とすること、祭祖時に「五房」（開祖の5人の兄弟が珠山で分居）の順に並んで団結力を高めることが決められた。なお、財源に関しては、収支明細表によれば、主な収入は医学奨学金積立の利息と族譜編集のための献金、新成員の納付金、珠山大楼賃貸料で、支出は冬至會と清明節祭祖墳の経費である。確かに、献金が不定期であり芳しくない。そのほか活動としては、一に、3月に廈門林後の薛氏宗親會、5月に江蘇徐宗親會薛剛来氏、9月に中華薛氏通譜編修委員など大陸や台湾の薛氏との交流、二に、4月4日清明節に石井坑での祖先祭祀、三に、大潭護岸整備工事である。近年は、大陸や台湾の薛氏との交流が盛んになっているが、宗族の基本である清明節の墓参りには村外居住者の参加が減少している。

以上によれば、宗親會の主な仕事は、一に、年2回の祖先祭祀、即ち宗祠で行う冬至會と開祖の地である石井坑での清明節、二に、新たな宗族成員の承認、三に、族譜の増編、四に、奨学金の給付、五に、村内整備である。これらは、一見、かつての宗親會の機能と同様であるが、宗族の求心力は弱まっている。直面する問題は、1995年の国家公園法施行以降、独自の発展計画を立てることができないこと、中高年のほとんどが外地で働き、村内に残るのは多くが老人で、村民全体の宗族意識が希薄化していること、そのためかつてのような献金は望めず、経費不足や活動における人手不足が顕著となっていることである。

これに対して、大道公宮を中心とした廟会は村民だけではなく、保生大帝を信仰する金門県内や大陸の信徒も参加する活動として年々盛んになっている。年間収入は献金が主で485万元に達し、宗親會の78万元や社区發展協會の83万元に比べて6倍強もある。旧暦3月15日の保生大帝祭は村外に住む一次的帰村者も含めて、村民総出の活動となっている。

大道公宮は1772年(清乾隆37年)に村民の資力で建立された。「無廟無宮、郷里不興」と信じられ、大自然の様々な災いから住民を守る。主神は保生大帝(宋代の名医呉本、北宋福建龍海県の人)で、註生娘娘、福德正神(土地公)、將軍爺も祀られる。かつてはそれぞれの聖誕日前後に、順に農曆3月15日、3月20日、2月2日、8月15日に儀礼を行ったが、1985年の大道公宮再建後は、毎年旧暦3月15日に全村で保生大帝を祀る。毎月1、15日にも廟前に三牲と酒、草料等をささげて祀る。

2017年4月8日(旧暦3.15)は次のようである。一日目、朝6時、道士による儀式、午後「巡安」、各家では門前に供物を並べた卓を置いて神を迎える。二日目午後2時金帛を進め、4時に玉皇大帝を送り、夜、「過布橋」儀式を行い、法師が經文を唱えて生肖を一つずつ送り出す。続いて4月21日から25日まで「2017金門平安祈福季保生大帝御繞境活動」が行われた。7日から村民総出で村内の道路に五方旗を挿し、竹符や旗碑を準備した。両郷三鎮の20幾つの保生大帝廟が集まり、金門保生大帝の起源である福建白礁慈濟宮の信徒千人以上もきた。21日午前は水頭碼頭から、22日午前は金城鎮から、珠山村を一周、23日は金寧郷から、24日は金沙鎮から各廟を巡安した。11月には中国、台湾、金門の保生大帝宮廟の交流のために、薛

永安ら5人が珠山大道宮を代表して台湾「世界保生大帝廟宇聯合總會」一行として廈門市の林後青龍宮と安兜青辰宮を訪れた。各地の巡安は男性が行う。

珠山発展協会は、全村民を対象とした様々な文化活動を行う。2017年度は、前年12月25日クリスマス会、2017年2月7～11日元宵節の時には伝統の乞亀や吃湯圓を作った。乞亀は伝統の食品で、地域の老婦人たちが特製の紅裸で亀型菓子を作って大道宮の卓上に置き、香を焚いて聖杯を投げ、願掛けをして参拝者がこれを持ち帰り、新年に還願に来る。吃湯圓は、当日午後、女性達が集まって湯圓を作り、夜、大道宮前で一緒に食べる。5月27日村内大掃除、9月18日（農曆7月28日）東宮に供物を供える、10月29日重陽節の敬老活動「泰山廟参り」、音楽会のほか、環保局主催の低炭社区改造運動、YMCA文化活動等。新旧の様々な年中行事や文化娯楽活動を女性が中心となってい、特に村民の多数を占める老人の交流の場となっている。収支表によれば、主な収入は14戸の民宿からの寄付である。

以上によれば、宗親會や大道宮など伝統の組織では、正式の活動は男性しか参加できないという旧来の習慣が行われているが、会務や裏方の仕事には女性の働きが不可欠である。それに対して発展協会は、1990年代以降に設立された新しい自治的な住民組織で、女性が中心となって日常生活に密着した活動を行い、高齢化社会にも対処している。

4. 珠山に嫁いだ女性の生活－1930年代～2010年代

珠山に嫁いだ女性は、一生を父方と夫方の2つの宗族社会でくらす。誕生、幼児期、結婚準備期、婚約までを父方集団で、結婚を境に嫁、母、老後を夫方集団で生きる〔松沢1995：171-196〕。珠山村では2016年11月と2017年12月に、5名の女性にインタビューした。李 JL (87、1930年生)、翁 LM (82、1935年生)、翁 YK (74、1943年生)、許 YX (62、1956年生)、黄 SY (45、1973年生)である。うち80歳代の2人は、男性達が南洋へ出稼ぎにでた1940年代半ばまでの僑郷期、1937年から45年までの日本占領期（珠山では約1年）、1940年代後半から1992年金門での戒嚴令解禁前までの戦時体制期、近年までの高齢化期という4つの時期を体験している。

(1) 1930年代から40年代まで

この時期は、僑郷、日本軍占領、国民党政権下に入るまでである。80歳代の2人は、ちょうど誕生から結婚までの父方集団での暮らしの時に、父がフィリピンに渡って亡くなり、母子家庭の状況で育った。当時としては典型的な前半生である。

李 JL (87歳) は1930年に古寧頭村で生まれた。兄弟姉妹はいない。5歳の時に父は、従兄(祖父の兄の長男)がフィリピンで営む布店の商いを引き継ぐためにフィリピンに渡った。父からは現金500元と布等が家に送られてきた。7歳の時に父はフィリピンで強盗に殺され、店も未登記だったために没収されて人手にわたった。一緒にフィリピンにいた従兄は1947年に金門に戻り、水鎮村の黄氏の女性を娶った。舅も夫が3歳の時にシンガポールに渡って病院で働いたが、現地での暮らしは苦しく、送金はなかった。舅は現地で結婚はせず、1970年に金門に戻り、2年後に他界した。当時、海外に出稼ぎに行った者で故郷に戻るのには10人のうち6人で、成功者は2割にも満たないといわれていた。

李 JL の記憶によれば、古寧も珠山も水田がなく、貧しかったために多くの男性が結婚して子供ができると海外に働きに行った、そのため夫のいない母子家庭は少なくなかった。母は纏足をしていなかったのも、父の死後、母が農作業をした。実家も農家だった。1930年代は、サツマイモに米を少量混ぜて食べた。7歳の頃、母が病気になったので、彼女が家事や農作業を手伝った。9歳からは実家の畑でケシ栽培も手伝った。ケシはアヘン用で、日本軍の命令で栽培した。アヘンの私的売買は禁止されていたのでケシは、日本軍に収めて多少の現金収入を得、布や米とも交換した。日本軍は1年ほどしかいなかったのもあまり記憶がない。母は後に再婚した。母は女性も人に侮られてはいけないとあって、国民小学校に通わせてくれたので小学6年まで学び、代書もできた。裁縫も、母が得意だったので小さい頃から学び得意である。刺繍は台北出身の英語の先生に習った。結婚後は、他人に頼まれて服を作るようになり、現金収入になった。

以上のように、僑郷期は母子家庭が一般的で、女性は日常の家事だけではなく農作業も担い、家庭内では家計の管理など戸主の代理であることも求められた。また娘に対しても家事や裁縫、農作業だけではなく、教育も

重視した。纏足については、彼らのような移民社会では女性は重要な労働力と認識されており、客家の女性と同様に纏足の習慣はなかった。

(2) 婚約と結婚

婚約と結婚は、宗族にとって重要な事項である。女性にとっては父方集団から夫方集団への移行であり、婚約と結婚の儀式は、家族にとっては嫁という労働力と出産による構成員の増加が期待される。

李 JL が結婚したのは18歳(1948年)の時で、婚約してわずか2か月後だった。国民党の「阿兵哥」が村にも来るといっているので、急いで村人に紹介してもらった。結婚前に相手に会うことはなかったが、花婿は背が高く、健康で、実家と同様に父が海外に出稼ぎにでたために母一人子一人の家庭だときいた。当時、良い花嫁の条件は健康で働き者であること、夫の親によく仕えて従順であることであった。婚姻に関しては、「非常時」だったので、正式な結婚の手続きである「六礼」⁽³⁾はほぼ省略された。

婚約時に、新郎側から金の指輪と腕輪、ネックレス、豚肉20kgが贈られた。新婦の嫁入り道具は、葬儀で着る衣服用の布(同輩用の白布と祖父母用の青布、舅姑用の黒布)、両親が亡くなった時に身につける「囲私裙」、ハサミや物差し、針と糸などの裁縫道具一式、柄物の布団(中に「鉛銭」を縫い込む、縁と同音だから、「飯巾」型に作る)、脚桶、面桶、尿桶などの日用品である。嫁入り時には「花籠」を持っていく。三段で、下段には化粧品、中断には花、上段には新郎から贈られた指輪やネックレス等の装飾品を入れる。

嫁迎いの儀式では、新婦家では生蛋茶、棒茶、「紅包」(小遣い)、棒面棒水、棒点心等を偶数でそろえる。新郎側のために「結縁卓」を用意して新婦の兄がもてなし、「貢茶」の儀式を行う。この儀式では、新婦側が新郎側に茶をささげ、新郎側はそれを飲み干して杯底に銭を入れて返す。実母は新婦に鶏肉を食べさせる、鶏は吉と同音で、生涯食物に困ることのないようにという意味。新郎家では、祖先を拝する儀式を行う。新婦が進む道には「長保椅」が置かれて遮るので、新郎は新婦を抱いて屋内に入る。新郎新婦の2つの指輪を紅い糸で結ぶ。また珠山では、新婚夫婦の布団を村の女性総

(3) 六礼とは「納采」(申込み)→「問名」(名前と生年月日の相性を占う)→「納吉」(相性が良いことを伝える)→「納徵」(結納)→「請期」(日取りの決定)→「親迎」(新婦迎え)。

出でつくる。

翁 LM (82歳) は、盤山村出身で、13歳 (1948年) までは塾で三字経を習い、その後、国民党統治下の国民小学校に入り、飛び級によって17歳 (1952年) で卒業し、同年に結婚した。夫が国民小学校在学中の彼女を気に入り、作文コンクール一位になって彼女の名が新聞に掲載されたのをみて手紙を送ってきたという。結納時には、夫側から豚肉50kg、ビスケット、飴を贈られた。「三八」(豚肉800斤と8千元) が最もめでたいとされている。結婚後3日目に夫と一緒に贈物をもって妻の実家を訪ねた。嫁入り道具は指輪、ネックレス、腕輪、イヤリング、衣服等ですべて偶数にする。衣服を入れた木箱の四隅には、実家が緊急用にと紅紙で包んだお金を置く。

許 GX (62歳1956年生) は、後湖出身。父は漁師で、7人兄弟の長女。母を助けて釣り具作りをし、弟妹をおぶって国民小学校に通ったが、弟妹を進学させるために中途退学。結婚は27歳 (1989年) の時。当時、台湾中に「阿兵哥」がたくさんおり、彼らとの結婚を心配した母が台北に出ることに反対したので、村人の紹介で珠山村の夫と結婚した。結納は豚肉50kgで、親戚からの結婚祝いのお返しにこれを使った。嫁入り道具は裁縫道具一式、寝具(枕、シーツ、布団カバー)、スピーカー、洗面器などの生活用品、尿壺。

以上のように、婚約と結婚については3例とも戦時体制時代の典型的な事例である。その特徴は、一に、珠山や周辺の村落では、国民党軍の「阿兵哥」との婚姻は好まれていない。二に、豚肉は重要な儀礼品であった。婚約時には、新婦側の要求に従って新郎側は豚肉数十kgを贈り、新婦側は親戚友人への結婚祝いの返礼品としてこれを使った。1980年代後期まで、豚肉は富のバロメーターであり、貨幣に相当する儀礼品として特別な意味をもっていた。1990年代以降は、豚肉ではなく、現金を贈るようになった。(3) 嫁として、母として

李 JL (87歳) は、夫から姑と争わず、尊重し、従順に、実の母と思って仕えてほしいといわれた。家のことは姑にすべてを学んだ。舅は他界しており、姑が家計を管理し、姑が老いてからは家計の管理を引き継いだ。姑には麻雀用の小遣いを渡し、亡くなるまで世話をした。嫁として家事全般を担当し、現在も毎月1、15日に祖先と保生大帝、2、16日に地基主(土

地神)を、果物や餅干、金、紙などを供えて祀る。軍事動員で駆り出される以外は主に家事をした。25歳(1955年)で子供ができるまで「婦女隊」に入った。軍事動員は毎日ではなく、主な仕事は軍服を洗う、繕う、軍人の靴を洗うことだった。

新婚当時、夫は中学の教師だった。給料は安かった。彼女が兵士の服を洗い、服を繕い、枕に刺繍して現金を得た。洗濯代は1人分15円で、毎回数人分洗った。繕い物は1枚3~5元だった。家には3、4塊の畑があり、野菜を栽培した。朝まだ暗いうちに押し車に野菜を積んで市場にいき、阿兵哥に売った。野菜の売上はすべて姑に渡した。生活費は夫からもらった。1992年戒厳令解除後、62歳から70歳まで夫とともに高粱を栽培し、毎年100kg収穫して高粱酒工場に売った。

家計の主な支出は教育費、祖先祭祀用の経費、冠婚葬祭などの交際費である。教育費は高校まで親が出し、高校卒業後は、子供が自分で学費を稼いで大学に進学した。一族の祠堂(大宗)の修繕のために各戸に「丁銭」が割り当てられた。1985年に大宗祠が改築された時、当主は5万元、父2万元、祖父1万元を納めて「長生牌位」を作った。

4女3男を産んだ。4人続けて女兒だったので、姑は3女と4女を人にやろうとしたが、夫が反対した。嫁ぎ先で出産し、姑が「座月子」の世話をする。男子が生まれたら実家の母が食物、子供の衣服、黄金を満月と4カ月目に持ってくる。女兒の場合は何もしない。子授けの願掛けでは、「白天公」に男児出生を祈った。道士が経文を唱え、三牲を供える。男児が生まれたら正月初九(天公生日)に全村民に油飯と紅蛋2個をおくり、家の前で小銭を撒くと子供たちがそれを拾った。現在、長女は66歳で専科卒、会計主任。次女は63歳衛生庁課長、三女は59歳で高卒、会計士。四女は大卒で教師、長男は中卒、台湾で働いている、次男は人事処専員、三男は専科卒。長男の孫と同居、孫は「神明選抜」で3人乩童の一人に選ばれた。

李 JL は、軍事体制下で「模範的女性」「模範的母亲」として政府から表彰された⁽⁴⁾。それぞれの基本資格と選抜基準には、当時、政府が女性に対してどのようなイメージを作りだして女性の思考や行為を管理していっ

(4) 江柏燁、マイケル・スゾーニラ [2011: 95] 参照。

たかがわかる。模範女性の場合は、資格は20歳以上で、すべての成人女性を対象とする。選抜基準は、一に国家への忠誠、二に敬軍、三に優秀な公務員、教師、四に公益に尽くす、五に生産事業に取り組む、六に夫を支え、子供を教え、よく家事を行う、である。模範母親は、50歳以上で子女が3人以上、一に若くして未亡人となり、子供を育てあげた、二に夫を支え、子供を育て、好く家事を行う、三に生産に励む、四にまわりとの協調、五に愛国、敬軍、六に政令への協力とする。明らかなのは、夫や子供、家に尽くす、未亡人＝貞女という伝統的な婦徳に加えて、愛国や敬軍、生産事業への参加という軍事協力を推奨していることである。

翁 LM (82歳) の場合は、17歳 (1952年) で嫁いだ時に、姑 (当時58歳) と2人の姑の姑 (80歳と85歳) がおり、この3人の世話が最も辛かったという。結婚して2日目朝から、三姑それぞれに洗顔用の水とお茶を用意して、部屋の入り口の前に立って起きてくるのを待った。家事全般を彼女が担い、30歳になって家計を管理するようになった。

夫は教師だったが、月給は200元と低く生活は苦しかった。戦時体制下では、金門島に10万の阿兵哥が駐屯し、珠山村周辺にも軍基地ができた。国民党は高粱酒造りに力を入れ、高粱栽培を島民に奨励した。彼女も高粱栽培をして、政府に売って現金を得たり、高粱1キロを米1キロと交換した。軍服に名前を入れる仕事もした。また店を開いて野菜や肉、海鮮、ミルク、果物などを売り、夫が58歳でなくなるまで38年間 (1992年) 続けた。軍事動員では、1961年まで10年間婦女隊で教師として字を教えた。珠山の婦女隊は識字学習で、週1回2時間あり、子供ができるに参加する必要はなかった。子供は7人で、息子4人と娘3人である。長男は台北工業高校卒で金城の電機会社に就職し、他の6人は台北で働いている。

許 YX (1956年生) は、結婚当初から舅姑 (現在94歳と91歳) と同居で、両親とも歩行が困難で、姑は認知症で介護はたいへんである。夫は戦時体制下では阿兵哥相手にタクシードライバーをしていた。軍撤退後は台商をしている。彼女は自給的な農業をしながら家庭の主婦であったが、2000年になってから知り合いに勧められて清掃員をしている。朝8時半から17時まで週休2日で、月給2万円、舅姑の介護をしながら働けるので満足している。子供は3人、みな台湾の大学を卒業して珠山に帰ってきた。長男は役場、

長女は香腸工場、次男は高粱酒工場で働く。

以上の3人の女性に共通するのは、舅姑との同居、介護を当然のこととして仕えていること、「三従四徳」という儒教倫理のもとで育てられ、その思考が根強くあり、黄XY（45歳）の年代もそれが浸透していることである。李JLが「模範婦女奨」「模範母親奨」⁽⁵⁾「孝道奨」で表彰されたということが、それをよく物語っている。また働き者で、僑郷時代以来、母子家庭という環境のなかで、戸主の代理をつとめ、農業や商売において男性にもひけをとらずに働く習慣があり、家計管理だけではなく、社会的な経済力も備わっている。

(4) 老いて

かつて、珠山では舅姑と同居して大家族で暮らすことが一般的であった。しかし現在、老人が人口の半分以上を占め、夫婦だけか、或は独居の老人が多い。戒厳令解除頃から、即ち40歳代以下の世代が台湾本島の高校や大学で学び、金門にもどらずにそのまま就職する者が少なくないからである。しかし老人の多くが、食事は米や麺と自分で栽培した野菜などで簡単であるが、昼間ひとりで食事する者はあまりいない。集まって食べ、おしゃべりをして過ごしている。特に、女性はよく食事を持ちよって食べ、ともに時間を過ごす。毎週一緒に買い物にも行く。発展協会も毎月、体験型の様々なプログラムを用意している。日常生活における村人間の結びつき、自然な形で強く保たれている。

また、老人は、一般に65歳以上になると毎月平均3千円の年金をもらい、子供達の仕送りもある。子供たちは同居はしていないが、頻繁に親の様子をみに帰り、親が老いたら帰村する者もいる。孝の概念も根強く伝えられている。

(5) 模範女性は、基本資格が20歳以上（既婚、未婚とも可）、行為が正しく悪い嗜好のない者、選抜基準の第一に、国家への忠愛を具体的な事実によって表現している者とある。模範的母亲は、本県に6か月以上居住し、50歳以上で、子女が3人いて品德に優れ、身体が健勝な者、第一の基準に、若くして夫を失い、子供を育て上げ、教養のある大人で、村で賞賛される者となる〔江柏煒、マイケル・スゾーニ2011：95〕。

5. 小結

珠山村に居住する男性にとって、宗族意識は重要であり、大陸や台湾などの薛氏との交流も熱心に行われている。女性も、伝来の儒家倫理に基づく家族意識を濃厚にもち、家族の成員として宗族の諸活動に協力している。しかし、中青年層の多くはすでに村外に生活に移しており、孝を基礎とした家族意識はなお根強くもつものの、宗族意識は希薄化が顕著である。

現在、珠山村が直面する最大の問題は、人口の減少と高齢化である。独居あるいは2人だけで暮らす老人がこれからどのように暮らしていくのか、村を離れて暮らす住民たちと村を結ぶ紐帯をどのように形成していくのか、が課題である。前者については女性を中心とした発展協会が活動し、後者については宗親會が中心となった廟会活動が求心力を発揮している。実態からいえば、女性の社会的役割は、すでに宗族の観念を越えて大きな意味をもって機能しているといえる。

参考文献

- 川島真 (2011) 「僑郷としての金門－歴史的背景」『地域研究 特集1 金門島研究－その動向と可能性』昭和堂 043－061頁
- 江柏煒 マイケル・スゾーニ (2011) 「国家、地方社会とジェンダー政策－戦地金門の女性の役割およびイメージの再現」『地域研究 特集1 金門島研究－その動向と可能性』昭和堂 088－130頁
- 謝翠玉総編輯 (2008) 「珠山聚落」『金門縣郷土 DNA－人文歴史、自然生態與保育』台北：国家文化總會 087－130頁
- 松沢員子 (1995) 「台湾の女」『女の文化人類学』東京：弘文堂 171－196頁